丸井今井邸武石弘三郎作品調査報告と平成30年度受贈今井藤七像について

伊澤　朋美

2018(平成 30)年度に行った三条市丸井今井邸内の武石弘三郎作彫刻作品の調査内容と、同年度に受贈した武石弘三郎作《今井藤七像》(小像)について報告する。

(1) 三条市丸井今井邸と今井藤七について

今井藤七(1849 ～ 1925)は、北海道の百貨店・丸井今井の創業者である。1849(嘉永２)年三条町上町(現・三条市)の米穀商・七平の三男として誕生。1871(明治４)年、単身函館にわたり商家に奉公し、翌年札幌に移り、小間物類を扱う商売を始めた。1874(明治７)年、現在の札幌市南一条西一丁目に、初めて「丸井今井呉服店」ののれんを掲げ独立。当時としては画期的な正札販売を行い、評判を呼んだ。その後も小樽、室蘭、函館、旭川など各地に支店網を拡大、1916(大正５)年には、北海道初となる３階建ての百貨店舗を札幌に開いた。丸井今井の基礎を築き上げるとともに、北海道の消費流通業界の先達として活躍をした人物である[1]。

図１　丸井今井邸資料展示室。向かって右が武七像、左が良七像(2018年 10月筆者撮影)

今回報告する作品が保管されている丸井今井邸は、藤七の地元新潟県三条市に現存する近代和風住宅である。明治時代後期頃に建築され、かつてはこの西側に母屋があり(焼失)、現存している部分は離れ座敷にあたる。戦中戦後は丸井今井百貨店の三条店として、地元物産の仕入れ拠点の機能を果たし、かつ社員育成の教育機関としての役割を果たしていたという[2]。

2000(平成 12)年、丸井今井三条店撤退に際し売却に付されたが、有志による募金活動により建物は三条市へ寄付され、民間団体である丸井今井保存会が管理運営し現在に至る[3]。2013(平成 25)年には、歴史的景観に寄与するとして国登録有形文化財に登録された。現在、丸井今井邸１階東側の一室が資料展示室となっており、丸井今井関連資料とともに武石弘三郎[4]作の彫刻作品が展示されている【図１】。今井藤七のブロンズ胸像を中心に、その両脇に大理石像《今井武七像》《今井良七像》が並ぶ。

今井武七は七平の四男。今井良七は、七平の五男。ともに兄・藤七の事業を手伝うため渡道。1883(明治 16)年、藤七は二人に資本を分け、今井商店の事業を兄弟三人の共同事業とし、1891(明治 24)年には、武七は独立して小樽にて今井呉服店を開業、翌年には良七が函館で独立開業し、以降も三兄弟で協力して丸井今井の発展に尽くした。

(2) 丸井今井邸内彫刻作品について

①《今井藤七像》(胸像)【図２】

素材:ブロンズ

形態、服装:胸像、和装

作品サイズ:高さ 52.0×横幅 38.0×奥行 30.0cm　(台座:高さ 146.0×横幅 66.0×奥行 39.5cm)

図２，３　《今井藤七像》(胸像)

1　『北海道歴史人物事典』北海道新聞社、1993年、48頁。
2　『三条市中心街地歴史的建造物調査報告書』三条市、2011年、106頁。
3　三条市教育委員会、丸井今井邸保存会編『丸井今井邸―蘇るいやしの空間―』三条市教育委員会(リーフレット)
4　武石弘三郎(1877 ～ 1963)。新潟県南蒲原郡中之島村(現・長岡市)出身の彫刻家。東京美術学校に新設された塑像科の第１期生として卒業後、ベルギー王立美術学校に学び、帰国後は団体や派閥には属さず、各界から依頼される肖像彫刻制作を中心に置きながら、制作活動を続けた。(佐々木嘉朗『彫塑家・武石弘三郎ノート』北日本美術、1985年)

制作年：1925（大正 14）年

サイン〔サイン表記箇所〕：「K.TAKEISHI. 1925」〔像背面〕【図３】

撰文：台座前面にパネル貼付（※④《今井藤七像》（全身座像）に附された撰文と同）

②《今井武七像》【図４】

素材：大理石

形態、服装：胸像、和装

作品サイズ：高さ 66.0×横幅 76.0×奥行 51.0cm　（台座：高さ 131.0×横幅 72.0×奥行 55.0cm）

制作年：1926（大正 15）年

サイン〔サイン表記箇所〕：「K.TAKEISHI. 1926」〔像右肩下部〕【図５】

撰文：台座前面に銅製プレート嵌込

「今井武七翁　　翁頭脳明晰計數に明にして企畫に富む／終始兄藤七翁を輔佐して家運の隆昌を招致す／報德會同人齊しく翁の德を慕いて止ます／爰に此胸像を建て以之謝恩頌德の意を致す」

③《今井良七像》【図６】

素材：大理石

形態、服装：胸像、和装

作品サイズ：高さ 65.0×横幅 83.0×奥行 47.0cm　（台座：高さ 131.0×横幅 72.0×奥行 55.0cm）

制作年：1926（大正 15）年

サイン〔サイン表記箇所〕：「K.TAKEISHI. 1926」〔像右肩下部〕【図７】

撰文：台座前面に銅製プレート嵌込

「今井良七翁　　翁其性恬淡商機に通ず／武七翁と共に克く藤七翁を扶けて悌道を全うし遐福を成す／爰に報德會同人此胸像を建て以て翁の德を稱へて報恩の意を表す」

《今井藤七像》（胸像）は、《今井武七像》《今井良七像》とともに『丸井今井九十年史』で「三邸胸像」[5]として紹介されている。《今井武七像》《今井良七像》については、今井記念館前庭に設置された《今井藤七像》（全身座像）制作に伴い、弘三郎に制作が依頼され、ともに除幕式が敢行された。当時の写真によりこれらの二像は、当初今井記念館内大階段の両脇に設置されていたことがわかっている【図８】。

図４，５　《今井武七像》

図６，７　《今井良七像》

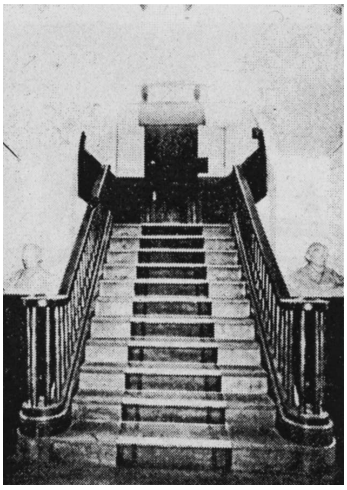

図８　今井記念館内大階段。向かって右に武七像、左に良七像。
（『今井：沿革と事業の全貌』建築写真編より）

5　『丸井今井九十年史』丸井今井、1962年、73頁。武七、良七がそれぞれ小樽、函館で独立開業したのを契機に、藤七を本邸、武七を樽邸、良七を函邸とし、三邸と称するという。恐らく別個に制作された胸像を、今井記念館解体後引き上げられた武七・良七像とともに保管・安置していたと思われる。

（3）今井記念館設置《今井藤七像》（全身座像）について

《今井藤七像》（全身座像）の制作経緯については以下のようである。

1924（大正 13）年 12月、丸井出身者有志が集まった。翌年にあたる 1925（大正 14）年は今井藤七の喜寿の年にあたるため、店祖・藤七の薫陶に報い、その業績を後世まで伝える目的で、銅像の建立と寄贈が提案され、決定した。有志たちは、銅像建設実現のための機関として「丸井報徳会」を結成。報徳会は、「当時彫刻界の大家、武石弘三郎氏」[6] に藤七の銅像並びに武七、良七の大理石胸像の制作を依頼した。

《今井藤七像》（全身座像）の原型は 1925（大正 14）年 7 月頃には完成。原型制作の様子を写した当時の写真からは、等身大以上の巨大な像であったことがわかる【図 9】。この頃、藤七は弘三郎のアトリエを、しばしば訪れていた[7]。

図 9　藤七像を制作中の弘三郎
（『彫塑家・武石弘三郎ノート』より）

1909（明治 42）年に留学先のベルギーより帰国して以降、弘三郎は数々の肖像彫刻を手掛けている。1925、6（大正 14、15）年頃までに制作された大型肖像彫刻だけでも、《松本順・石黒忠悳二像》（1912（明治 45）年）、《大倉喜八郎像》（1913（大正 2）年）、《鍋島直正（閑叟）像》（1913（大正 2）年）、《馬越恭平像》（1920（大正 9）年）等と多数挙げられ、着実に経験と肖像彫刻家としての知名度を高めていった様子がうかがえる。丸井報徳会が弘三郎に依頼した契機は定かではないが、肖像彫刻家としての名声と共に、同郷であったことも奏功したと思われる。1927（昭和 2）年に弘三郎は、同じく新潟県出身の実業家・板谷宮吉[8] の大型肖像彫刻も手掛けている。

報徳会の結成と、銅像・大理石胸像の寄贈の好意に対し、当時の丸井今井社長・今井雄七は、像安置の場所として札幌に今井記念館を建設する[9]。

1925（大正 14）年 10月中旬には鋳造が完成するので、10月末には東京・目白の藤七自邸に銅像を引き移し、その後札幌に移し、11月 7 日に除幕式挙行の段取りを組んでいたところだったが、1 年ほど前から患っていた藤七の腎臓の病が急速に悪化し、除幕式を迎えることなく藤七は 10月 24日に病没する。銅像は 11月、目白の邸宅庭前に仮安置されたという[10]。

1926（大正 15）年 11月 15日、銅像と大理石胸像は札幌に移され、藤七の銅像は記念館前庭に、武七、良七の大理石胸像は大階段両脇にそれぞれ安置された。同年 12月 24日、銅像と大理石胸像の除幕式と、今井記念館開館式が盛大に執り行われた。像の設置が当初予定の約 1 年後となったことについては、喪に服した後に行われる運びとなったと推測される。

しかし、戦争の波には抗えず、1943（昭和 18）年には店祖・藤七の像は銅像応召で供出されてしまう[11]。失われた店祖の像容を伝えるのは、写真資料や次項で記述する小像のみである。

6　註 5 前掲書、150頁。

7　『丸井今井百年のあゆみ』丸井今井、1973年、494頁。同書によると藤七は「『大勢のものから、こんな立派な銅像をつくって貰えるなんて、私は日本一の果報者だ』と非常に喜んでいた」という。藤七が訪れたのは駒込のアトリエか。

8　初代板谷宮吉（1857 ～ 1924）。越後国刈羽郡宮川村（現・柏崎市）に生まれる。1870（明治 3）年北海道に移り、その後小樽で海産物商に勤め、独立。その後海運業に進出し、1899（明治 32）年、板谷合名会社（のち板谷商船に改名）を設立。1911（明治44）年には日本ハワイ間の定期航路を開設する等事業を拡大させた（参考：註 1 前掲書）。肖像彫刻はブロンズ製で、藤七像と同じく羽織袴姿で椅子に腰かける全身座像。現存せず。

9　『株式会社丸井今井創業百二十年史　一世紀と二十歳の歩み』丸井今井、1992年、119頁。註 7 前掲書、495頁。

10　註 7 前掲書、494頁。

11　註 7 前掲書、216頁。1955（昭和30）年、藤七の没後三十年を迎えるにあたって、丸井報徳会は藤七の銅像再建を計画し、彫刻家・加藤顕清（1894 ～ 1966）にその再現を依頼。1955（昭和 30）年 8 月には除幕を迎え、その後は別館屋上に安置された。丸井報徳会は今井記念館の解体と共に 1970（昭和45）年に解散した。

④《今井藤七像》(全身座像)※現存せず　【図 10】

素材:ブロンズ

形態、服装:全身座像(椅子に座る)、和装羽織袴、右手に扇子を持つ

サイズ:高さ５尺５寸、巾５尺[12]

制作年:1925(大正 14)年、除幕 1926(大正 15)年

サイン(サイン表記箇所):不明

撰文:「今井藤七翁　　順境に居て驕らず逆境に處して撓まず／人を待つに甚厚く己を遇する最薄し／勇猛精進一意前み慈顔温容諸衆化す／家運日々に榮えて北海は益々饒なり／翁の薫陶を受け其德を慕ふもの無慮幾千／爰に報德會を組織し此銅像を建て以て知恩報德の微衷を致す／従三位勲二等文學博士　渡邊龍聖撰／大正十五年十月」[13]

題字:渋沢栄一筆「謝恩」

台座設計:吉田享二

図 10　今井記念館前庭の今井藤七像
(『今井:沿革と事業の全貌』建築写真編より)

本像は当初札幌市内の中島公園への設置が検討されていたが、既述のように今井雄七により今井記念館【図 11】が建設され、同館前庭中央に設置された。今井記念館は間口十二間半、奥行十間の鉄筋コンクリート２階建で、建物様式はスパニッシュ式を加味したルネサンス式とされる[14]。施工は木田保造率いる木田組。以降館内では美術展等様々な催事が行われ、1968(昭和 43)年頃に取り壊された[15]。

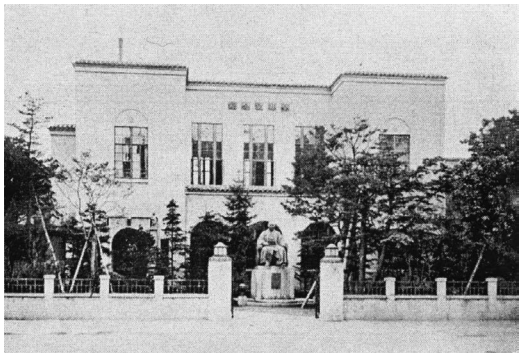

図 11　今井記念館。前庭に今井藤七像が見える。
(『丸井今井九十年史』より)

設計を担当したのは、建築家で早稲田大学教授を務めた吉田享二(1887 ～ 1951)で、《今井藤七像》(全身座像)の台座設計も行っている。

吉田享二は、1887(明治 20)年兵庫県生まれ。1909(明治 42)年に東京帝国大工科大学(現・東京大学工学部)に入学し建築学を専攻。卒業後 1912(大正元)年９月より、早稲田大学理工学部建築学科で教鞭を執ることになった。建築材料学や建築計画などの講義を担当し、1914(大正３)年に助教、1916(大正５)年には教授となり、1951(昭和 26)年に没するまでその任にあった[16]。

弘三郎は 1910(明治 43)年から 1947(昭和 22)年に定年退職するまで、早稲田大学理工学部建築学科にて「彫塑」「自在画」といった教科を教えた。弘三郎は同僚である吉田享二に、台座の設計を数多く依頼した[17]。

吉田享二が手掛けたとされる弘三郎作品の台座は以下の通りである[18]。(　)内は設置当時の場所を示す。

・《竹山屯像》1918(大正７)年　(新潟市内竹山病院庭内)

・《山田又七像》1920(大正９)年　(長岡市内宝田石油本社公園)

---

12 『今井:沿革と事業の全貌』日刊土木建築資料新聞社、1940年、57頁。

13 撰文を寄せた渡邊龍聖(1865 ～ 1944)は、新潟県古志郡東谷村(現・長岡市)出身。東京専門学校(現・早稲田大学)、アメリカのコーネル大学に学び、1911(大正元)年、小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)初代校長に就任。1916(大正５)年、丸井今井の顧問に迎えられ、経営の近代化に資した(参考:註７前掲書)。撰文については註12前掲書、14頁。

14 「今井記念館及び丸井報德会」註12前掲書、56、57頁。

15 北海道建築士会編『北海道の開拓と建築　下巻』北海道、1987年、33頁。

16 『吉田享二先生追想録』吉田享二先生追想録刊行会、1954年、206、207頁。

17 武石弘三郎「先生と台座」註16前掲書、140頁。

18 田中修二監修『シリーズ・近代日本のモニュメント１　偉人の俤』ゆまに書房、2009年、註４、16前掲書参考。

・《馬越恭平像》1920（大正９）年　（目黒大日本麦酒株式会社庭内）【図 12】

・《板谷宮吉像》1927（昭和２）年　（小樽市内か）

・《安部磯雄像》1927（昭和２）年　（早稲田大学戸塚グラウンド内）

・《栗林五朔像》1928（昭和３）年　（室蘭栗林邸内）

・《ヘルマン・ホフマン像》1937（昭和 12）年　（上智大学構内）

・《新津恒吉像》1938（昭和 13）年　（新潟市公会堂前庭）

図 12　馬越恭平像と台座
（『吉田享二先生追想録』より）

中でも《馬越恭平像》台座は、和装の像と石の台座が融合した、当時吉田の会心作であった（台座部分は現存せず）。椅子に座した和装像が台座上に設置されるスタイルは、後の《今井藤七像》（全身座像）、《板谷宮吉像》にも踏襲されている。

（４）《今井藤七像》（小像）について

2018（平成 30）年度に寄贈を受けた、武石弘三郎作《今井藤七像》（小像）については以下の通りである。

⑤《今井藤七像》（小像）【図 13】

素材：ブロンズ

形態、服装：全身座像（椅子に座る）、和装羽織袴、右手に扇子を持つ

サイズ：横幅 20.5×奥行 25.0×高さ 32.0cm

制作年：1926（大正 15）年

サイン〔サイン表記箇所〕：「K.TAKEISHI. 1926」〔椅子左側面下部〕【図 14】

図 13, 14　《今井藤七像》（小像）

当像は、今井記念館前庭に設置された④《今井藤七像》（全身座像）を縮小した小像である。小像にしては比較的細かく作り込みがされており、椅子の肘掛の装飾や、着物の衣襞が忠実に再現されていることがわかる。既述した三条市丸井今井邸にも、同型の小像が数体収蔵されており、丸井今井保存会への聞き取りによると、丸井今井関係者への贈呈品であったということであり、一定数量産されたと思われる。

弘三郎の作例の大部分が戦時供出などで失われている中で、このような関係者の手に渡った贈呈品や頒布像は、本像の様相を知る手がかりになる。こういった顕彰事業における彫刻家の仕事が、本像の制作にとどまらず、それに付随する作品にも及んでいた事実を示している。生涯多数の肖像彫刻を手掛け、第一人者として知られた武石の制作活動を知る上で、貴重な作例であると言える。

丸井今井邸での調査にあたっては、三条市と丸井今井保存会にご協力をいただきました。この場をかりて感謝申し上げます。

（新潟県立近代美術館 主任学芸員）